

# 生き甲斐について

武山 ふみ男

私は六十二才——。二年前に定年退職し、今は新橋にある関連会社へ週三日、神奈川県平塚市から通勤している。

ソコソコ務めてきたつもりだが、「これを生業としてきた」と胸は張れず、仕事を生き甲斐とした「花も実もある人生」の輪郭はボヤけている。

一方で私は趣味を生き甲斐としてきた。

それはオヤジバンドだ。

長年ライブ活動に励んでいるが、とかくアマチュアバンドというものは、いつまでたっても客層は家族・友人・仕事仲間・近所の人だ。お察しの通り満員御礼にはほど遠く、パラパラの入り。

「あゝあ、わびしいな。こんなこといつまで続けていればいいんだろうか。もし私が死んだら棺に楽器を入れてもらおうか……。それとも自分の銅像でも立てて生きてきた証を残そうか」などと喘ぐ。プロでなくても男子のライフワークとしての覇気だけはあつた。

実は、このオヤジバンドとは別に、私には、オーディオという道楽もある。

生の音。それがオーケストラでも、無伴奏のチェロでも、ジェット機やSTIであろうと、生よりもある意味ではオーディオが勝っていることを真髄としている。

機器の誘惑、理想はエスカレーターし、懐具合と算段するのも楽しみだ。そんなことに一日中想いをめぐらしたりもする。カタログをニヤニヤして眺め、うつつをぬかす至福の時。

おもしろいだけで確固たる何か欠けた時間の過ごし方。自堕落のような気がする。

生き甲斐とはこのような私的な欲望ではなく、社会に地続きになっている堅実さを伴う生きざまではないだろうか？

そのような充実した人生について思いをめぐらす時、私は錬金術師の一生を賞賛してしまう。それは職業として中世では高い位置にあったし、科学的にも認められていた。

錬金術師が絶対不可能なことは現在では常識だが、これぞ真実一路とばかり駆け抜けた一生はさぞ充実していたと推測される。臨終では確信に満ちた眼で子に思いを伝え、その子もやがて子に夢をたくす。現代の私たちからみれば執念だけが浮き彫りになりますが、当時はどっしりと構えた静かな暮らし向きであったかもしれない。

生き甲斐についてそんな試行錯誤をしていた秋、大型の台風に遭遇し、通勤の帰路で東京発下り東海道線が新橋で運転見合わせといなり、わたしは帰宅困難者になってしまった。

「そうだ、横須賀線がある。とにかく行きつくところまで行かねば」と地下深い横須賀線のホームへ早足で下った。普段の様相は一変し、新橋駅に劇画的後継が展開された。

うろたえる群衆。係員にくっつくかかかる旅行者。まるでパニック映画。いつしか自分も映画の出演者となっていた。「ダイハード」の「ブルース・ウィルス」になったつもり。

「こんなことに巻き込まれてツイてないぜ」なーんちゃって。でもおもしろい・ワクワクする。

ここ新橋駅では、山手線・京浜東北線も含めすべての電車が止まり、改札から出ることも、トイレに行くことも困難で、ギッシリと皇帝ペンギンに囲まれているようだ。

その状態を打破するため乗客の一人が非常のトビラを開き、一度も通ったことのない通路をヌーの群れのごとく疾走した。

そうです！皆と同じ苦勞を共有し、同じ足並み、同じ呼吸でつながった。同胞です。シビれました。社会と地続きになっている。自己の欲望や道楽ではない。

クタクタですが「生きているうっ」て感じ。

結局電車が動いたのは一時間後。品川で二時間停止し、その後もノロノロ。全てを終え帰宅したのは午前一時。熱間は元に戻り、物事をやりとげた充実感が爪の先までビッシリきている。なかなかの生き甲斐だ。

私は帰宅するやいなや家内に事の顛末をイキイキと報告した。家内は家事をしながら怪訝そうな一瞥をくれ、「あなたはただ非日常の後継に興奮しているだけ。つまりただのヤジ馬。生き甲斐とはほど遠いわね」と嘲るかのようだった。

私はハツとした。「社会と地続きの充実感」とまくしたてた舌の根も乾かぬうち、しっぺ返しをくらった。家内の言うことにも一理ある。……これは困った。

やがて年が変わり三月。春の低気圧のため、私はまたも帰宅困難者となってしまった。東海道線下りは茅ヶ崎を過ぎたころピタリと止まり鉄の箱と化した。箱の中で私はヤジ馬になりながら生き甲斐について考えた。

動かぬ電車は哲学する場所となった。

強風のため茅ヶ崎↓平塚間の相模川の鉄橋が渡れないのだ。今が嵐のピークだから当分運転再開の見込みはない。雨は容赦なく窓に突進し、風は車体を揺らしている。

六十分が経過した。依然止まったままだ。東海道線はトイレ付きなのでその点心配はないが、立っている人は辛いだろう。なかには品川あたりから立ちっぱなしの人もいるだろう。

車内では電車の運行について経緯を交す声や、不安のざわめきが拡大しつつある。

「あのう私さつきからずっと座ってますから、よかったですらどうぞ」

「あっ、オレも座りっぱなしだからどうぞ」

普段だったら無言で席を立つ人も多いが、今日は言葉を発したほうが自然だ。このゆずり合いはこの車両のあちこちへ広がりつつあった。まるでこの車両が避難場所の公民館でもあるかのように乗客は連帯しつつある。

私の右隣は小学生男子だ。左隣は幼児の女子とその母親。

私はひどく腹がへっていた。胃酸過多の非常食として持っていたビスケットは貴重なはずなのだが、なにかんがえず両隣の子たちに菓子を勧めた。少年はよほど空腹だったとみえてビスケットを一箱たいらげてしまった。

「オジサン。ボク平塚の徳延に住んでいるんだよ。お父さんが車で迎えに来てるんだ。あそこだよ」

指差した方向を見れば、線路に平行した道に車が止まっている。

「さっきからお父さんとメールしてるんだけど、顔もみえてるんだけど、飛び降りるわけにはいかないね」と伏し目がちになった。

すると男の子の前に立っている四十代女性が「ぼうや、おとうさんだって強風の中、橋を渡って必至に来たんだ。ここはがんばりどころだよ……」と励ました。

そんな話題をきっかけとし、この少年はずいぶん身の上話をし、私と彼とは話のはずむ馬の合う間柄となった。

そんなこんなで十五分もたったころ、突然車内にアナウンスがあった。

「強風のため鉄橋がわたれません。茅ヶ崎まで引き返します」と。なんと！レールを逆走するとは。こんなことは初めてだ。「やった！とうちゃんに駅まで向かえに来てもらえる」。少年はさかんにメールを綴りはじめ、送信する前に私にそれを見せるのだった。それは「電車の中の人たちが助け合っていて感動したよ。この電車に乗って、こんな目に合ってよかったよ。今日のことには忘れないよ」という文面だ。では私自身にとって今日の出来事はどうだったのだろうか。そこでもしも私が多重人格者（Aさん、Bさん）だったらと空想してみよう。

まず一人目。人生に楽観的で子供じみたAさんならば次のようになる。

「世の中捨てたもんじゃない。バンド、オーディオとか私的生き甲斐を車内で思案し、足ぶみし、仮死状態になっていた私にとって、その対極である「車内の情の交流……まともさ。誠実さ」が浮き彫りになった。それは相対的価値観として燦然と輝きだし、私は諭された。個の生き甲斐を蚊帳の外に放り出してから始まる別の生き甲斐……精悍さを感じた。そして私は少年を同じ釜の飯を食う同胞であるかのよう位置付けてしまった」と。

一方、偏屈で老練なBさんなら次の見解となる。

「車内の人々は同じ釜の飯を食う家族とは違う。生きずりの関係だ。会話をしても誰も心の中まで入ろうとはしない。重くはならない。この車両の代わりに戦時中の防空壕を引き合いにだせば、行きずりではなく家族や近所の人と中にいれば、皆は爛々とした眼で外の火力と地獄絵図をみてる。と同時にお互いの心の中全てをみている。」

口を開かずとも思いは崩れ込んでくる。

生きずりの関係ではそのようなやりとりはできない。善人とか悪人とかの序列を無視した表面的気楽さを皆が演じているのだ。

だから少年の「感動したよ、こんな目にあってよかったよ」は車内の人々の爽快な役者ぶりに酔いしれているのだ。少年はやじ馬かもしれない……以上Bさんでした。

AさんBさんどちらにしても自分が置かれている状況、心境で観察しているが、それは相対感であり、人間である以上、神の絶対感に及ばない。

では、もし車内に悪人や心根の卑しき者か紛れ込んでいたらどうなるか？

全てが覆されるだろう。全く別の物語が展開される。

その時私は生き甲斐とか幸福をどう捉えるのだろうか。